

入学者のことば

入学者のことば

歯学科1年 吉岡優奈

入学してから早くも3か月が経ちました。入学した私たちにとって最初は新しい体験の連続でしたが、今は大学生活にも慣れて楽しい生活を送っています。入学当時、まだ同級生の名前すら知らなかった頃を思い返すと、今は仲良く話せる同級生のみんなとは別人のようで、なんだか不思議な気持ちになります。そう思えるほど、同級生のことをたくさん知ることができたのかと思うと、同時に嬉しく思います。今回「入学者のことば」を執筆させていただくにあって、入学から今までを振り返り、感じていることを綴りたいと思います。

入学してから日々感じているのは、当たり前ですが一人一人が全く異なる人生を歩んできたのだということです。入学した場所は同じでも、第一志望だった人、そうでなかった人など一人一人が様々な背景を持っています。また入学生の中には新潟県出身の人もいますが、県外出身の人もたくさんいます。私も県外出身ですが、地元の異なる友達ができたのは初めての経験でした。入学生は全国各地から新潟に来ているため、話しているだけで新たな発見がたくさんあります。友達とは、出身地や方言、高校生活など様々な話をして盛り上がりますが、友達の話のなかで新しく知ることがあれば、逆に自分が当たり前だと思っていたことが友達に通じないこともあります。自分自身の話を共有しあうのはとても面白いですし、新たな発見が多く、世界が広がったように感じられます。まだまだ知らないことが多い同級生もたくさんいると思うので、たくさんの人と会話をし、仲を深めていきたいです。

同級生には尊敬することも多くあります。一年生の間は歯学部全員が顔を合わせるのは毎週金曜日のみで、「早期臨床実習」と「歯学スタディ・スキルズ」という授業があります。これらの授業では人前で発表する機会があるのですが、聞いている人に目を合わせ、堂々とした態度で発表することができる同級生が多いと感じます。私は発表が苦手で、自信のなさが目立ってしまうことが多いため、堂々と発表する同級生を見て憧れや尊敬の気持ちを抱きました。また、発表に対して質問や意見を述べたり、グループワークを円滑に進めたりする積極的な姿も印象に残っています。周りの同級生が真剣に物事に取り組む姿を見ると、自分も貢献したいという気持ちが大きくなります。このように高めあう関係を築くことが、学年の強みにつながるのだと感じました。

歯学部は少人数の学部であるため、他の学部と比べてより団結することができると思います。これから6年間の大学生活では、楽しいことも辛いこともみんなで経験することになります。同じ学問を学ぶ仲間同士、協力しあいながらみんなで頑張りたいです。最後に、これからたくさんお世話になる先生や先輩の皆様、6年間よろしくお願いします。

入学者のことば

口腔生命福祉学科1年 池内花

新潟大学歯学部口腔生命福祉学科に入学して、あっという間に約3か月が経ちました。大学生は想像以上に毎日が忙しく、一人暮らしも初めは慣れないことばかりで大変でしたが日々模索しながら課題や授業をこなし、最近は充実した生活がで

きてきました。

新潟大学に入学して既に様々なことを学びました。

私は持ち前のコミュニケーション能力を活かし、歯科衛生士として将来たくさんの患者さんの精神的不安を和らげ、予防歯科を普及したいと志して歯学部口腔生命福祉学科の受験を決めたため、もともとは初対面でのコミュニケーションや新しく友人を作ることには不得意さを感じてはいませんでした。しかし「誰も知っている人がいない」という環境と「大学生になった」という自覚が緊張や不安材料となり、歯学部の新入生全体で行われたオリエンテーションなどでは、自分の思っているようにすぐに周りの学生と話したり、友人を作ったりすることはできませんでした。しかし、慣れない環境や難しい状況でも自分らしく多くの学生と接しコミュニケーションをさらに学んでいくことが重要だと改めて考え、自分から積極的に声をかけて友人を作ること、前に進むことが出来ました。

新潟大学歯学部では入学して早々に早期臨床実習が始まります。大学病院の様々な科を周り先生方からお話を聞いたり、実際に患者さんに行っている治療を見学したり、私たちが患者役になり6年生に診察してもらったりと、さらに歯学部生としての実感が湧く良い経験となりました。治療見学では、大学病院ならではの細かく分かれた各専門診療科を周り、主にどのような治療を行っているか、治療・診察する上でどのようなことを意識しているかなど歯科医療人の立場について多く学ぶことがありました。患者役実習では、6年生に検診や染め出し、歯磨き指導、かんたんな記録の仕方などを実際に行ってもらい、患者さんの立場をより身近に体験し、これから先の4年間で自分がこうして成長できるのかという不安を感じるとともに、自分の思い描く歯科医療人になれるよう固い決意を持つことが出来ました。

新潟大学に入学し、新しい慣れない環境での学生間の関係性の構築、早期臨床実習を通じて感じたことは、大学とは様々な理由や目標を持ちながらも全員が同じことを学び、ともに同じゴールに向かって支えあい、時に切磋琢磨しあいながら成

長することが出来るとても刺激的で貴重な場であるということです。歯学部生として過ごすこの4年間を充実し満足のできるものにするために、これからも歯学部の仲間と様々な体験をし、それぞれの目指す歯科医療人になれるよう努力していきます。

大学生活という贈物

口腔生命福祉学科編入3年 齋藤史菜

新潟での生活も早いもので3ヶ月がすぎ、すっかりもも太郎アイスが美味しい季節になりました。今回で縁があって、「歯学部ニュース」の執筆の機会を頂き、ここに私がいた軌跡を、こうして言葉として記録できることに、心からの幸せを感じています。

申し遅れましたが、齋藤史菜と申します。私は23歳でこの学科に編入しました。大学院進学を見据えた決断でしたが、それは同時に、年齢や人間関係、新しい環境にうまく馴染めるかどうかという不安とも向き合う選択でした。寒さの中、1人で後期試験の受験に臨んだ自分を、今では本当に褒めてあげたいと思っています。

編入してすぐ、幸いにも同じ境遇の編入生が4人いて、自然と支え合いながら新しい生活を始めることができました。3年生のみなさんも驚くほど温かく、優しく私たちを受け入れてくださり、次第に不安は安心に変わっていきました。

大学生活は思っていた以上に密度が濃く、学びの機会にあふれていました。たくさんの施設見学、そして山のようなレポート。ひとつひとつこなしていくたびに、「これが大学生なんだ」と実感が湧いてきました。

また、サークルではなく“部活文化”というのも当初は驚きでした。入ろうかどうか迷いましたが、結果的に私は3つの部に入り、特に野球部ではマネージャーとして活動しました。最初は何も分からなかったスコアの書き方も、今ではしっかりこなせるようになり、自分でも成長を感じています。運動会ではパン食い競争に出場し、多学年との交流もでき、とても楽しい経験になりました。

た。部活に入ったことで5・6年生の先輩方とも自然に仲良くなれたのは、私にとって大きな財産です。

学びの面でも、挑戦の日々でした。PBLでは、慣れないスライド作りに苦戦しながらも、自分の考えをまとめて伝える力が少しずつついてきたように感じます。以前、働いていた経験もあり、社会保障について学ぶ授業は特に楽しく、イメージしやすかったです。

この学科は、勉強だけでなく、ボランティア活動や学外イベント、就職活動のサポートまで、本当に幅広く支援が整っています。そのおかげで、当初は大学院しか見えていなかった視野が大きく広がり、福祉現場や企業、さらには異業種への就職など、さまざまな道が見えるようになりました。専門学校時代には想像もしていなかった未来が、今、私の前には広がっています。

私がここで過ごす日々は、挑戦の連続であり、気づきと成長に満ちた時間です。そしてそれは、優しく迎えてくれた仲間や先生方、さまざまな機会を与えてくれた環境のおかげです。

この新潟の地で過ごす2年間は私にとって人生の財産となるでしょう。そして、これからここに入学する皆さんにも、自分らしい軌跡を残せる日々が訪れることを願っています。

入学者のことば

歯科矯正学分野大学院1年 福井智子



今年度大学院に進学し、歯科矯正学分野に入局いたしました福井智子と申します。今回「入学者のことば」の原稿依頼をいただき、学生の頃に「卒業の言葉」を執筆させていただ

たことを思い出しました。あれからもう2年近くの時が流れていくことに驚かされます。そしてこの2年間に、学生生活の6年間を超える、大きな心の変化と成長があったように感じます。学生の頃は歯科医師になることが第一の目標で、そのた

めにばかり行動していました。どんな課題をこなすにも、自分のためになるとは思いつつも、常にどこか受動的な一面が残っていました。

歯科医師国家試験に合格し、研修期間の前半は魚沼基幹病院に勤務させていただきました。患者さんを自分一人で治療するという責任感や、そのためにもっと努力できることはないかと向上心が強くなるのを感じました。また、円滑に仕事を行い病院に貢献するための工夫や、一緒に働く方々への配慮など、社会生活面も成長を感じました。何より、患者さんに「ありがとう」という言葉をかけていただける幸福感を知り、この職業について良かったと感じる日々を過ごしました。

研修の後半には新潟大学に戻り、矯正歯科にて研修を行いました。半年ぶりの同期との再会では、おもしろい発見がありました。同じ学舎で6年を過ごした友も、気づけばこの半年のうちに違う方向を向いていて、それぞれの道を極めるための準備をしていたのです。環境や考え次第で歯科医師としての道は無限大に広がっていることを知りました。それぞれの選択を応援する気持ちと共に、自分は選んだ道の先で、どのような歯科医師になりたいのかを考えさせられました。大学院に進学した私は、どの道を選んだ人からも頼りにしてもらえそうな、プロフェッショナルになりたいと考えています。歯科矯正学分野にお世話になり始めてから、研修の半年間と入学してからの4か月が経ちました。1日1日をみると進歩も変化もないように思われるかもしれませんが、毎日の学びの積み重ねで、今の自分はあの時の自分とは全く違うように感じます。この感覚を忘れず、自分が理想とする歯科医師像へと向けて、貪欲に学び続けていきたいです。

技工士とアカデミアの架け橋を目指して

包括歯科補綴学分野大学院1年

吉田 馨太



新潟大学医歯学総合研究科 包括歯科補綴学分野に入学しました吉田馨太と申します。この度、(第147号)「入学者のことば」執筆の機会を頂戴しましたので、僭越ながら筆を取らせて

いただきたいと思います。私は、2000年より有床義歯分野の歯科技工士に従事し、25年余りの臨床経験を積んできた歯科技工士です。現在も大学院生として勉学に励む傍ら、新潟に本社を構える歯科技工所に従事し、臨床とともに、後進の育成、現場管理なども行なっています。ですので、在学中の多くの先生方とは異なる経歴を持つ社会人大学院生となります。

これまでの技工人生の中で、臨床家として考え行動することに、一定の誇りのようなものは持ってきました。一方で、補綴歯科学会に代表される学会などの場面、あるいは教育に携わる著名なアカデミアの歯科医師と直接関わる中で、それだけでは片手落ちであると気づかされることもしばしばありました。そこで、臨床に関わりながら、あらためて包括的に歯科医師目線で学び、加えて疑問に感じたことを中心に研究をする機会を設けることで、感じたそのギャップを埋めることができるのではないかと考え、大学院への進学を決意いたしました。

近年、歯科技工士が不足し、国民に安定して良質な補綴装置を供給できなくなる危険性、いわゆる歯科技工士問題が顕在化しています。これまでのキャリアで感じた本質的な問題点は、保険点数下での低賃金、それに起因する長時間労働などの環境要因、そして結果として起きている、高齢化と若年層の離職による深刻な人手不足などが代表例として挙げられます。その中で環境要因は私の手の届く範囲に限っては、仕組みを構築しマネジ

メントすることで一定の改善が見込めるようになりました。同時に、その改善が進んだことで、新たな課題も見えてきました。それは、補綴歯科における正しい教育の必要性です。歯科技工士の現場は、令和の時代においてもいわゆる職人のような徒弟制度の要素が強く、「やり方」ベースの指導方法が中心になりがち傾向があります。それに対し、クリニカルサイドにおいては、症例を分析し、症例ごとに向き合う大切さ、いわば、方法論ではなく目的論に近いところもあり、根本的な考え方の違いがあると実感しています。これが冒頭で述べたギャップのひとつでもあり、これを翻訳者として後進に伝えて行くことで課題解決、ひいては業界活性化の一助になるのではないかと考えています。

これからの大学院生活では、まずは医局の先生方にご指導を賜りながら学び、自身の糧とし見聞を深めていきたいと考えています。このような貴重な機会を与えていただいたことに感謝を忘れず、日々邁進していきたいと思っています。

入学者のことば

口腔生命福祉学専攻博士前期課程1年

瀧澤 侑加

このたび、口腔生命福祉学専攻博士前期課程に入学いたしました瀧澤侑加と申します。本学口腔生命福祉学科(17期生)を卒業した当初は大学院進学など全く考えておらず、その後の心境の変化に自分でも驚いています。

卒業後は1年間、新潟大学医歯学総合病院で医療ソーシャルワーカー(MSW)として勤務してまいりました。MSWは、病気や生活に伴って生じる経済的・心理的・社会的問題に対して支援を行う専門職です。病院内の多職種との連携はもちろんのこと、地域の医療機関や行政、福祉施設などと連携・調整を図る必要があるため、幅広い知識と柔軟な対応力が求められます。実際に業務にあたる中で自分に足りない点の多さに直面し、思うようにいかないと感じることも少なくありませんでしたが、患者さんやご家族から感謝の言葉を

いただけたときには、大きなやりがいと達成感を感じました。

福祉専門職の道へと進み、福祉の仕事にやりがいを感じる一方で、学生時代に学んだ歯科分野との関わりが次第に薄れていくことに、どこか寂しさを感じるようになりました。そのような折、医科の現場ではソーシャルワーカーの存在が比較的広く認知されている一方で、歯科医療の現場ではその役割が十分に浸透していないのではないか、という疑問を抱くようになりました。今後はさらに高齢化が進むため、歯科医療現場にも複雑な社会背景を抱える患者さんは増加すると予想されます。こうした背景を踏まえ、歯科衛生士と社会福祉士のダブルライセンスを活かし、歯科医療におけるソーシャルワーカーの意義を見出したいという思いから、歯科専門の病院へMSWとして転職する決断をいたしました。

その過程で、研究活動にも関心を持つようになりました。これまでMSWの研修会や学会に複数参加しましたが、先輩方の発表を通じて実践に活かせる多くの学びや新たな視点を得ることができました。私自身も、歯科医療におけるMSWという視点から専門性をさらに深め、実践と研究の両面で貢献できる人材を目指したいと考えるようになりました。歯科と福祉、両分野の知識をさらに深め、研究に必要なスキルを学べる場として、大学院進学は最適な選択肢であると確信しています。自らデータを収集・分析し、修士論文を完成させることは、自信と成長につながる貴重な経験になるはずです。

転職、そして大学院進学と、この1年間で大きな決断を重ねましたが、いずれも自らの専門性を高め、よりよい支援につなげたいという思いからの前向きな一歩です。地域のソーシャルワーカーの一員として貢献できるよう、大学院での学びを有意義なものとし、充実した時間を過ごしたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

博士後期課程に進学して

口腔生命福祉学専攻博士後期課程 1年

島 村 陽南子

口腔生命福祉学専攻博士後期課程に入学しました島村陽南子と申します。このたび、「入学者の言葉」を執筆する機会をいただきましたので、博士前期課程および博士後期課程への進学の経緯や現在感じていること、今後の展望について述べさせていただきますと思います。

私は本学の口腔生命福祉学学科を16期生で卒業後、博士前期課程を修了し、この春から博士後期課程へ進学いたしました。博士前期課程に進学した理由は、明確な目標があったから、というよりは、将来がはっきりと見えていなかったからです。学部3・4年生の時には、企業の説明会に参加したり、歯科医院に見学しに行ったりもしましたが、営業職の自分や臨床の現場で働く自分の姿が想像できず、将来に対する迷いや不安がありました。

その中で、学部のPBLや講義を通じて、発表をしたり、意見を交わして考えを深めることに面白さを感じ、「研究をやりたい」と漠然とした思いが芽生えました。また、コロナ渦で経験できなかった学生生活への心残りや新潟への愛着もあったかもしれません。

博士前期課程では、学部からの同級生たちもおり、課題の締切前には励まし合ったり、情報を共有したりと、心強い存在でした。大学院生室で会えると嬉しかったです。しかし、博士後期課程に進み、学部から一緒だった同級生はいなくなってしまう、少しさみしさを感じているところです。

博士後期課程へ進学した理由には、前期課程での学びや経験が充実していたことがあります。調査に関わるなかで、先生方と一緒に様々な経験をすることができ、「もっと挑戦してみたい」と思うようになりました。また、学会発表で富山や北海道に行けたことも、とても貴重な思い出となりました。

現在は、博士前期課程で収集したデータをもとに分析を進めています。なかなか思うような結果

が出ず苦戦することもあります。分析や論文執筆を着実に進めるため、先生方と定期的に打ち合わせをしながら取り組んでいきたいと考えています。

博士前期課程2年目からは、都内の自治体で歯科衛生士として勤務しています。大学院と業務、それぞれで学んだことが将来的に相乗効果を生み、うまく掛け合わせて生かせたらと思っています。

今後の展望については、まだ明確なビジョンがあるわけではありません。数年後、50代の自分も、正直なところ想像が付きません。今は、目の前の仕事や分析を着実に取り組みながら、職場の

歯科衛生士の働き方を見つつ、将来のモデル像を模索していきたいと考えています。新潟での学会で、卒業生の先輩方とお会いできたことが印象に残っており、行政で働く歯科衛生士の先輩方とご飯を食べながら情報交換が出来るような繋がりを持てたらうれしいなと密かに思い描いています。博士後期課程では、ご指導を頂きながらも自発的に取り組み、打たれ強く分析や論文作成を進めていきたいと考えています。大学院での経験や学びを通して、歯科衛生士として自分の在り方を少しずつ形にしていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

